



自分の居場所を作れる子

校長 神田 朋恵

“自分の居場所を作れる子”と聞いて、皆さんはどのような子どもを想像しますか。自分の居場所とは、具体的にどのような場所でしょう。家庭、学校、習い事の場所、公園、図書館などの公共施設…。一概に“学校”といっても自教室だけでなく、校庭、音楽室・理科室などの特別教室、保健室など様々あります。そこは単純に“場”だけでなく、“人（友達、大人）”との繋がりの有無も大きく関係することでしょう。

“自分の居場所を作れる子”は、先月6日学校運営協議会で、本校地区が目指す「育みたい子どもの力（姿）」を熟議する中で決定されました。本校の児童は優しく思いやりがある、上級生が下級生の面倒をよく見ている、素直に気持ちを表現できるなどの良さがある反面、自分に自信がない、打たれ弱い、精神的に幼い感じがある、自己中心的な部分があるなどの課題もあげられました。大事なものは、自己肯定感・自分で考える力を付けること・他者と関わるコミュニケーション力であり、自己肯定感やコミュニケーション力が上がれば意欲が上がるのではないかと、そのために学校・家庭・地域が継続して関わり「自分で自分の居場所を作れる子」を目指そうということになりました。その際、子どもたちの行いを認めていく、様々な経験を積み成功体験を重ねさせる、大人が決まったルールを敷かないなど、大人が子どもに接する時に心掛けたいという話も出ました。

5年生が3日から2泊3日で館岩自然の教室に出かけます。小学校で初めての宿泊学習ですので、その目的は様々ありますが、館岩では「非認知能力」の育成・向上を目指しています。「非認知能力」とは、簡単に言うと学力やIQと違って数値で表せない力のことです。

- ① 自分の目標を粘り強くやり遂げるような自制心
- ② 目標達成のために手段を工夫する調整力
- ③ 共通の目標に向かって他者と協働できる能力

教育界では“真の学力”の育成には、認知能力と非認知能力どちらも大切であると言われていて、最近では経済学の研究でも成人して社会的、経済的に成功する上で、どちらも重要であることが明らかになっています。この非認知能力は特に就学前の段階で成長が顕著ですが、学童期・思春期を通じて発達すると言われています。

館岩に行く前に児童にアンケートをとるのですが、本校児童は昨年度に引き続き「自尊心」の部分が若干低いという結果となっており、学校運営協議会での地域・保護者の皆様や教職員の見方、感覚を裏付けるものになっています。授業を見ていると、子どもは教師の投げかけにすぐ「えっ、できない！」と言います。「やってみよう。」と内心思っているのかもしれませんが、先に“防御策”を張ります。“失敗を恐れる”と言ってもいいでしょう。だからこそ、我々教師は日々子どもの声を聴き、共感し、認め、励ますことを大事にしています。上述した下線の内容、大人の接し方の工夫と重なる部分が大きいです。夏休みは目前です。非認知能力を伸ばす絶好のチャンスです。

今月も保護者、地域の皆様と同じ方向を向いて教育活動に取り組んでまいります。御理解御協力のほど、よろしく願いいたします。御心配御不明な点がございましたら、どうぞ御相談ください。